

令和2年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価		総合評価	
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価		結果の分析及び改善案
		1 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力を育む効果的な教科指導の工夫 2 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 3 学校と家庭、学校と地域、校地間、学科間の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開								
1	進路指導課	教員の教科指導力の向上を目的とし、教科や年齢が多様になるように少人数の教員グループを編成し、そのグループ内で授業公開週間を中心として互いの授業を参観し、振り返りの会を開く。	本校では、初任者や教職経験年数が短い若い教員が多い。 また、教科ごとに授業力の向上を図る取り組みはできているが、教科を超えた取り組みはあまりできていない。	授業アンケートの「知識・技能を習得し、思考力・判断力・表現力を身につけることができた。」の項目の1回目と2回目の結果を比較し、2回目の評価の方が高かった教員の割合で判断する。 A: 75%以上の教員の評価が向上 B: 50%以上の教員の評価が向上 C: B評価未満の場合	公開授業で見学したら入力するシートによると、ほとんどの教員が授業参観ができていない。11月の公開授業週間で、事前に計画を立てる、朝礼メモにその日の公開授業を載せるなど、実施率を高める工夫をしたい。	C	休校のため長期授業が実施できなかったり、休校による授業回復やそのための指導等があり、授業参観があまりできなかった。 今年度は休校により、授業アンケートが前期ほとんどの教科で実施できていないため、1回目と2回目の結果を比較することができなかった。	C	職員会議で再度、授業参観の実施をお願いをしたが、教員の多忙な状況と指導の優先等により、授業参観の実施が難しくなったと思われる。 しかし、教員の指導力の向上は、学校経営目標にもあげられているように必要不可欠なものであるため、時間を確保し効果的な取組を実施できるよう研究したい。	
	厚生課	「朝読」を充実させるとともに、図書委員会を活性化させ、より効果的な広報活動や読書コンテスト、特別展示等のイベントを行うことにより、生徒の図書室利用を促進し、図書貸出し冊数の増加を図る。(前年比10%増を目指す。)	図書室利用の呼びかけや新聞の発行、学園祭での取り組み、新見市立図書館での展示等を行ってきたが、昨年度は貸出冊数は伸びなかった。	貸出した本の冊数が、前年度比で A: 10%以上増加 B: 5～10%未満の増加 C: Bに達しなかった	図書室オリジナルエンタメや1棟掲示板への委員会の展示等の広報活動や、GTの授業での活用等で利用促進を図った。貸出し冊数は8月末時点で前年度の3.6倍に増加した。引き続き、委員会活動等を通して利用促進を図っていく。	A	図書委員会の広報活動や授業での図書室利用も増え、貸出し冊数は12月末時点で前年度の4.4倍となっている。	A	図書委員会の従来の広報活動の他、本年度新しく本校1棟掲示板での展示、保健委員会との共同企画での活動ができたこと、授業での図書室利用も増えたこと等もあり、貸出し冊数は前年より大幅に増加した。今後も今年度の活動を継続するとともに、「朝読」が更に充実したものになるような工夫をしていきたい。	
	1年次	総合的な探究の時間において、小論文・ディベート・スピーチ活動、主権者教育を計画的に実施し、生徒の思考力・判断力・表現力を育成する。	昨年度は小論文・ディベートなどで求めるものが多かったり、偏っていたりすることがあった。各種取組をさらに充実したものにするために精選していく必要がある。	生徒にアンケートを実施し、総合的な探究の時間を通して、思考力・判断力・表現力が向上したと回答した生徒の割合で評価する。 A: 8割以上が肯定的回答 B: 7割以上が肯定的回答 C: B基準未満	小論文・ディベート・スピーチ活動などは10月から行う。前半期は、少ない授業数の中、進路探究の時間をとり、生徒たちの学問観・職業観を高めた。	B	今年度のディベートは「日本は外国労働者の受け入れを拡大すべきである」というテーマで行った。どのクラスもこの授業を通して日本と世界の問題へ着眼点を広げることができた。総評の時間を使って自分の意見を持つ力が83.1%、「自分の意見を深めたい、整理したい」が90.3%、「他者に自分の考えを分ちやすさ伝える」が83.3%の生徒が向上したという結果となったので、達成されたと判断できる。	A	小論文とディベート、そして主権者教育へ繋げる流れは非常に良いが、総評の時間少くなく、余裕はあまりない。 現時点で年間通して良い計画がたっているが、精査してもらう少しゆとりを持って総評を実施する必要性を感じる。 来年度の一年生へ繋げていきたい。	
	国語科	新入試・新課程に向けて、科内研修を充実させるとともに、他教科と連携し、学校全体の言語活動の充実にも努める。	各自が校外研修に参加したり、新テストに向けた授業を実施したりしているが、科内だけでなく、他の教科と連携して取り組むことができるよ。	A: 研修5回以上、かつ他教科と連携がとれた。 B: 研修5回以上、もしくは他教科と連携がとれた。 C: どちらでもできなかった。	各自新テストに向けた授業を実施しているが、研修、他教科との連携は現時点ではまだできていない。	C	新テストに向けた授業、研修は行ってきたが、他教科との連携は実施できていない。	B	他教科との連携のあり方については、言語活動に関する授業実践や資料として提供できる情報を示していく等、実施可能なものから進められるようにしていきたい。	
	地歴・公民科	ICTの活用などによりわかりやすい授業と効果的な発問により、確かな学力の定着を目指す。生徒の思考力を向上させ、問題解決力を伸ばす指導を行う。	生徒の教科への姿勢は、地理歴史・公民科の目指す、思考・探究的な学習ではなく、暗記的な側面を強く印象付けたものになっている。	生徒に対して行う授業アンケートにおいて、「ICTの活用などによりわかりやすい授業となるよう、工夫されているか」「効果的な発問により、思考力を育成する授業となるよう、工夫されているか」という項目を設け検証する。 A: 「非常に満足している」と「だいたい満足している」が95%以上 B: 「非常に満足している」と「だいたい満足している」が90%以上95%未満 C: Bに満たない	地歴科・公民科すべての科目において教材提示装置等を活用した授業を行っている。生徒の視覚に訴え、より深い理解が得られることに寄与していると感じている。	B	授業アンケートの結果からは、「ICTの活用などによりわかりやすい授業となるよう、工夫されているか」「効果的な発問により、思考力を育成する授業となるよう、工夫されているか」という項目に対して「非常に満足している」と「だいたい満足している」が95%以上を占めており、当初の目標が達成できたと言える。	A	地歴科・公民科すべての科目において教材提示装置等を活用した授業が行えた。授業の発問においては、「新テスト」を意識して、深い学びと思考力・考察力の伸長をはかるべく、内容を工夫した。このような取組から、ICT機器の活用からは、生徒の視覚に訴え、より深い理解が得られることに、また授業改善からは、より深い観察力・分析力が得られることに寄与したと感じている。	
	数学科	令和3年度中国・四国算数・数学研究大会発表も見据えて、教科会議内で思考力・判断力・表現力を育む研究・意見交換を行い、授業実践に反映させる。	知識・技能をある程度有しているが、思考力・判断力・表現力を問う問題に弱い生徒が多い傾向にある。大学共通テストは、思考力・判断力・表現力等を中心に評価を行うとされている。	A: 毎月意見交換を実施でき、授業評価アンケートで思考力・判断力・表現力を身につけることができたとする割合が8割以上 B: 思考力・判断力・表現力等を身につけることができたとする割合が5割以上 C: B基準未満	すべての月で毎回の意見交換ができていないわけではないが、研究大会に向けての方向性は定まりつつある。今後、より具体的な取組を行い、授業アンケート(前半・後半)での思考力・判断力・表現力の生徒評価の変容を見ていく。	B	授業アンケートでは「非常に」と回答した割合は9割弱となり、1回目から2回目にかけて平均で2割弱の向上のみみられた。しかし、教科内の情報交換の場を毎月もつことができず、取組の集約等も今後の課題となった。	B	各学年の教員がそれぞれの生徒の状態を把握しながら、各段階で必要な力を伸ばす取組を考え実践した結果が、アンケートに現れていると感じている。また、意見交換の場を十分にもつためには、業務全体の量を減らしていく必要があると感じる。今後は取組の集約と成果検証を行い、次年度以降の指導につなげる資料として蓄積していきたい。	
理科	身近な事象を教材として取り上げながら、科学的に探究する態度を育み、共通テストに向けて論理的思考力を育成する。 (1)観察、実験、学び合いなどの能動的な学習場面を取り入れる。 (2)各学習活動において、既習の事柄と関係する日常的な事象を挙げ、論理的に説明させるような発問を実施する。	いずれの講座も生徒の既習事項の習熟差が大きいため、主体的に学び、考察する姿勢が十分とは言えない。	具体的計画と取組の(1)(2)を A: 学期当たり3回以上 B: 学期当たり2回 C: 学期当たり1回以下	(1)コロナ対策のため実験等の時間はとることができなかったが、学び合いなど能動的な学習場面はそれぞれの場面で工夫がなされ、振り返りの時間もとることができている。今後も継続し、対策を講じた上で実験の実施も考えている。 (2)授業の各場面で身近な事象を取り上げ、思考力を育てる活動がなされているが、十分ではない。長期休業の課題として論理的文章を作成させるなど、取り組みを考えながら充実させていきたい。	B	(1)授業の遅れやコロナ感染症対策の影響で実験の実施は2・3回にとどまった。一方学び合いの機会も日常的に行い、学習に対する共助の雰囲気をつくりあげることができた。 (2)日常的な事柄は積極的に取り上げている。しかし、ほとんどの生徒は基礎の定着が不十分であるため思考力を求める発問を行うことは困難であり、基礎事項確認の発問にとどまることが多かった。	B	(1)実験については来年度は積極的に行いたいだが、状況によって困難な場合は動画視聴を含む演示実験の機会を充実させることを考えている。また、学び合いは、一定の効果があったので来年度も数を多く行いたい。 (2)日常の事象を取り上げることが、生徒の理科に関する興味・関心・思考する意欲を高めるために今後も行ってきたい。しかし、個々の生徒で学力差があるため、生徒に応じて発問をいくつ用意するなど教材づくりに工夫を凝らしたい。		

令和2年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

番号	分学	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価		総合評価	
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価		
					結果の分析及び改善策					
1 知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力を育む効果的な教科指導の工夫 2 主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成 3 学校と家庭、学校と地域、校地間、学科間の連携・協働をふまえた効率的な教育活動の推進 4 本校教育活動とその魅力を内外に伝える広報の展開										
1	情報科	ICTの効果的な活用を通して、生徒の思考力・判断力・表現力を育成する。1学期にワード、2学期にエクセル、3学期にパワーポイント等を活用しながら、自分の考えや情報を他者にわかりやすく伝える活動をさせる。	自分の考えを他者と共有しながら、よりよい考え方を身に付ける必要がある。パソコン利用についてのアンケートを実施した結果、使ったことがない・不安であるという割合は、ワード75%、エクセル59%、パワーポイント63%であった。	生徒アンケートを実施し、思考力・判断力・表現力を身に付けることができたという割合は生徒の割合で評価する。 A:8割以上が肯定的回答 B:7割以上が肯定的回答 C:B基準未満	「非常に」「だいたい」を合わせた肯定的回答は97.3%であった。 授業の進め方について、「タイピングの練習をした。」という生徒が複数いるため、実習始めにはタイピングを取り入れていきたい。	A	「非常に」「だいたい」を合わせた肯定的回答は100%であった。	A	2学期から始めたタイピングは、生徒の課題意識とも相まって、大変好評であり、自分自身の伸びも即時にわかるため、今後も継続していきたい。	B
	芸術科	表現の探索について、年間を通して各科目における見方・考え方を働かせ、イメージや意図に基づいて構想し、表現を工夫する力を育む学習活動を行う。	まじめに授業に取り組み、知識・技能の習得は十分出来るが、イメージや意図に基づいた表現については苦手な生徒が多い。	思考力・判断力・表現力に関する評価において、イメージや意図に基づいて構想し表現することに70%以上・・・A 60%以上・・・B 60%未満・・・C	休校期間があり、授業の進捗が遅れているが、各科目における見方・考え方を働かせることができるような授業内容を計画し、実施している。2学期後半～3学期にはイメージや意図に基づいた構想し、表現を工夫できるよう進めていきたい。	B	思考力・判断力・表現力に関する評価において、イメージや意図に基づいて構想し表現することに関する総括評価が「B」以上の者70%を超えることができた。	A	令和3年度は指導と評価の一体化を取り入れた年間指導計画をもとに生徒の表現力のさらなる向上を図りたい。	
	保健体育	ICT機器を効果的に活用し主体的な学びを充実させることで、生徒の思考力・判断力・表現力を育成する。そのために、体育科全員(常勤3名)が、リフレクション映像により、課題の即時フィードバックや生徒同士の話し合いを充実させ、自主的学習の充実に取り組む。	表現活動を充実させ、主体的な学習を促すような教科指導の工夫が必要。	【指標と実施期間】 1年男子・・・9月～11月(仮)、1年女子・・・11月～1月 2年・・・5月～12月 3年・・・10月～1月 A・・・3名取り組んだ。 B・・・2名のみ。 C・・・1名のみ。	下山:1年男子体育のバレーボールのビデオ(ゲーム・スマイク)を撮影し、生徒にゲームイメージを持たせ、フッタービデオの撮影によって、授業後の成長を確認する取り組みを行っている。 また、2年サッカー選択グループは、G-suiteのクラスルームに課しのゲームや、授業でチャレンジさせているリフティングのhowto動画を共有し、反転学習や復習に活用している。 立石:バレーボール授業内のグループ学習(スマイク)において、ipadでフォームの確認と修正を生徒に行わせた。 中川:3年生の選択制授業において、ソフトボール、ソフトテニスの種目選択をしている生徒(特に技術に課題がある生徒)に対し、ipadを使ったフォームチェックからの改善を試みた。	A	3名の目標達成で、授業進化の一助となった。	A	モバイル端末(Ipad)の有効活用は、体育における生徒の探究活動に非常に効果的である一方、体育の目標のひとつである、体力の向上(運動量と運動の質の確保)がおろそかになりがちであるため、バランスの良い、効果的な活用法の研究は継続課題である。 また、生徒により探究的な活動を行わせるための手段として、G-suiteのクラスルームへの予習課題(めあてや動画の掲載)によって、授業開始前から探究活動が開始し、授業開始時には、思考力や判断力に基づいた活動が即座に行われているという状態を作ることができるよう、研究を進めたい。	
	英語科	授業で連読教材を取り入れ、英文読解力をつける	昨年度1月進研の長文読解の結果は、1年生は全国平均が7.4点に対し、本校は7.1点であった。また2年生の1月進研の長文読解の結果は、全国平均が12.5点に対し、本校では11.6点だった	今年度、1～3年生の進研記述模試の読解問題の結果を平均する。 全国平均点以上で、平均点より3点以上B それ未満であればC	2、3年次は授業で連読教材を取り入れて、読解力の向上を目指している。1年生では、授業で教科書を中心に読解力の向上を図っている。7月の進研模試はコロナ禍でほとんど授業の無い中で受けたので、比較対象としては適切でない。	B	11月進研模試の読解問題の結果 1年 全国平均点 8.31に対し、本校1年生は7.95 2年 全国平均点 5.25に対し、本校2年生は3.75 3年 全国平均点 11.41に対し、本校3年生は8.4であった。どの学年も全国平均点より低かったが読解の効果はある程度出ていると思われる。	B	今年度は全学年に連読教材を取り入れて、全国共通テスト対策を行った。1年間での成果はある程度あったが、継続して行うことで、全国平均点を上回るように指導を行ってきたい。	
2	生徒課	委員会活動のさらなる活性化によって、主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒の育成を図る。委員会によるHR・集会での呼びかけをこれまで以上にすることによって、学校生活の向上に向けた啓発活動を行う。	各委員会とも活動が行われていて、一定の成果を上げている。しかし、すべての活動が生徒全体に見えながら、取組の目的や成果が明らかになっているとは言えない。	委員会活動に関する全校アンケートを行う。「委員会活動が活発に行われている」と回答する生徒の割合がA:90%以上 B:75%以上 C:B未満	定期で委員会通信を出したり、掲示板などを活用して広報・啓発を行ったり、生徒の目に見える活動として活性化している委員会もみられる。今後は、SHR等での委員会生徒からの呼びかけや啓発活動をさらに充実させ、生徒自らが考え、行動できる指導を行ってきたい。	B	A	今年度も委員会顧問による指導により、各委員会とも活発な活動が行われていた。掲示板などを活用して広報・啓発を行ったり、委員会新聞を充実させたりすることで、生徒の目に見える活動として活性化していると感じている。	B	
	2年次	学校連携コーディネーターと連携・協働しながら、主権者教育を中心とした総合的な探究の時間の取組を通して、主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を育成する。	地域や社会に対して積極的に関わった経験を持つ生徒は多くない。	生徒アンケートを実施し、地域・社会の問題を「自分の問題」として捉え、行動しようとする気持ちが高まったと回答した生徒の割合で評価する。 A:8割以上が肯定的回答 B:7割以上が肯定的回答 C:B基準未満	総合的な探究の時間において、SDGsを入口として、個人探究に取り組んでいる(10月末まで)。地域・社会との関わりを意識した内容(グループ探究)を本格的に実施するのは11月からである。生徒アンケートも取組後に実施する予定である。	B	A	今年度も主権者教育にSDGsの視点を取り入れたため、世界的な視野や持続可能な社会という視点を持った地域課題を考えることができた。学校連携コーディネーター後藤様のご尽力もいただきながら、新見立大学学長講演会、新見みらいづくり会議の方々への質問会、新見市役所担当の方々へのインタビュー等を通して、履修内容をブラッシュアップすることができた。この地域ネットワークを更に強固なものとしていきたい。		
	3年次	主体的に社会に貢献しようとする使命感と実力を兼ね備えた生徒を育成し、適切な指導を行うことにより進路実現へ結びつける。	1年次より「仰光タイム」として思考力・表現力の伸ばしに注力し、地域学習に取り組んできた。また、入社改革の中で総合型選抜・学校推薦型選抜指導の重要性が増している。	総合型選抜・学校推薦型選抜(国立立大学)受験者のうち A:3分の2以上の生徒が合格 B:2分の1以上の生徒が合格 C:B基準未満	希望進路と生徒の適性を考慮した情報提供や進路指導に努め、講演会や課外学習など進路実現に役立つ経験の機会を作った。 9・10月出願の総合型選抜(国立立大学)への出願予定者は現在10名程度。	B	国立立大学総合型選抜・学校推薦型選抜受験者で結果が発表された19名のうち、11名が合格。合格率は約58%で、3分の2には達できなかったものの過去5年では合格者数、合格率ともに最も高いものとなった。(2021年1月現在)	B		1年次より取り組んだ仰光タイムにおいて表現力を高め、主権者教育においてSDGsや地域をテーマに考え、行動する活動が評価につながった面もある。生徒の進路希望に合わせた、地域の方から話を伺う機会を設定できたことも良かった。また、生徒と面談を重ねる中で、生徒の希望進路と生徒の持つ経験や能力に適した受験方法を紹介できたことも合格率の向上につながった。

令和2年度 新見高等学校(南校地) 具体的計画

番号	分掌	具体的計画と取組	現状分析	今年度の達成基準 【評価指標】	中間評価		最終評価			
					達成状況・今後の対応	評価	達成状況	評価		
					結果の分析及び改善策		総合 評価			
3	教務課	<p>内職の改定に向けて 校地解消に向けたワーキンググループの進捗を受け、作業を進める。 前年度までに進めてきた作業(関係部署への情報収集の依頼)を継続して行い、R3年度末完成へ向けて情報収集を継続する。</p>	<p>南北校地となり16年が経過し、統合当時の決定された内規と現状がずれ、不整合が散見される。 また、校地解消に向けた今年度の大きな課題は、進捗の決定とそれに基づいた新課程の再写真をつくることである。内規をも含めた他のワーキンググループが動き始めた。慎重に情報収集を進めることが望まれる。</p>	<p>ワーキンググループの進捗に合わせ、 ①改訂計画が完成する。 ②計画に基づいたアクションを起こす。 ③計画に基づいた改定案が関係各所でほぼ出まらがる。 A…①②③ B…①② C…①</p>	<p>ワーキンググループの動きがまだないで静観中。</p>	<p>－</p>	<p>次年度が校地解消に向けた「顔」のすりあわせの年ということが校長から示された。 本目標は、次年度にそのまま継続することとした。</p>	<p>C</p>	<p>同左</p>	B
		<p>新教育課程の完成 昨年度末、校地解消に向けたワーキンググループで新教育課程の案を作成させた。校地解消小委員会の指示を受け、7月を目途に完成に向けた作業を進める。</p>	<p>新教育課程の大枠は完成したが、選択科目の厳選が目下の課題である。 生徒と教師が高い意欲をもって自己実現を叶える礎となるよう慎重に編纂したい。</p>	<p>①完成 ②未完成 A…① C…②</p>	<p>現段階では、完成に向け、高校教育課の助言を受けながら、策定計画に基づいて計画的に進行中である。現在、学校設定科目の開設計画書の編集にさしかかっている。</p>	<p>A</p>	<p>現段階では、完成に向け、高校教育課の助言を受けながら、教育課程については、ほぼ完成と言って良いところまでに至った。 高校教育課からの学校設定科目の開設計画書に対する指摘を受け、高校教育課との連絡を密にしながら完成に向かっていた。</p>	<p>A</p>	<p>学校設定科目の開設計画書に基づき、年間計画の作成へ向かいたい。</p>	
		<p>業務縮減への取り組み 課内業務の効率化を図る。</p>	<p>ここ数年來、効率化への取り組みを行ってきたところだが、今年度は目標化し、超過勤務時間の縮減につなげたい。</p>	<p>①3つ以上の効率化 ②2つの効率化 ③1つ以上の効率化 A…① B…② C…③</p>	<p>・課内ワーキンググループ制をとり、進捗に組み込まれた課会議をできるだけ行わずに済ませ、その時間を授業準備などの時間に充てられるようにしている。 ・出席簿集計自動化ファイルを課内ワーキンググループ(教科係)係長が考案し普及させた。 ・教務副課長が、教務が受け持つ広報(学校案内、学校要覧、普通科通信、中学生向け新聞、高校説明会パワーポイント資料、全国募集用リーフレットなど)コンテンツの作業スケジュール表を作成した。このことで、作業が見える化し、次年度へ向け、大きな効率化へ繋がると確信できた。</p>	<p>A</p>	<p>効率化は複数年度の取り組みによってかなり改善された。中間評価記載内容の継続的な運用もできることから、業務時間の縮減に向けた効率化や合理化の意識が、教職員の中に醸成されてきていると実感している。ICT機器の有効活用なども一助となっている。</p>	<p>A</p>	<p>業務時間の縮減に向けた工夫は継続的に、業務時間を増幅している業務については、積極的な廃止や、トレードオフを常に考えることが必要だと考える。 また、変化に対応していくことで「プレッシャー」を感じることなく積極的にチャレンジすることも不可欠なため、業務時間縮減に向けた工夫をしつつ、生徒により良い学びを与えられるよう努力したい。</p>	
	生徒課	<p>部活動の延長時間を見直すことにより、部活動生徒の下校時間を早める試みを行う。</p>	<p>現在の部活動延長は18:00～19:00までの1時間の延長が認められており、生徒の下校時間は18:30近くになっている。</p>	<p>下校時間をできるだけ19:00に近づける検討を行い、少しでも前進した場合はA、現状からの改善が見られなかった場合はBとする。</p>	<p>現段階では、議論を積み上げるまでには到っていない。今後は、生徒の交通手段との関係や、教職員の勤務の在り方等を考えた議論を課内で進めていきたい。</p>	<p>C</p>	<p>生徒課内で複数回議論したが、結論には至っていない。</p>	<p>C</p>	<p>部活動時間の効率化、あるいは、顧問の勤務時間の縮減を目的として検討を行った。特に、校地をまたいで活動している部活動については、普段から活動時間どう確保するかという課題を抱えている。このような課題が残っていることから、来年度に向けて、同一顧問同士での意見交換を十分に行った上で、生徒課内で引き続き議論していきたい。</p>	
	進路指導課	<p>進路指導課に関連するすべての取組を検証し、業務の効率化、精選を行う。</p>	<p>個々の取組の必要性は感じられるが、長い間積み重ねり肥大化した様々な業務を見直す必要がある。昨年度後述する上限が達成できた教員の割合は18%である。</p>	<p>教員の時間外業務の上限「月45時間、年360時間まで」を達成できた教員の割合に着目する。 A：達成者が70%以上の場合 B：達成者が50%以上70%未満の場合 C：50%未満の場合</p>	<p>模試活用講習会を開くなど、改善に向けた取り組みを行った。 また、コロナの影響で実施できなかったが、『職業人の話を聞く』講演会については、今年度から業者に委託し、教員の負担が大幅に減った。 残された期間でさらに具体的な検証、取組を行いたい。</p>	<p>B</p>	<p>12月勤務までの教員の時間外勤務の上限「月45時間、年360時間まで」を達成できた教員の割合は39%であった。共通テストの引率者を必要最低限の人数にすることや、検討会の終了時刻を19:30に設定するなど具体的な改善がいくつかできた。</p>	<p>C</p>	<p>今まであたり前に行ってきた進路に関する取り組みを、働き方改革や良用対効果等の視点から、見直しを怠っていないという意識の醸成はできた。 来年度導入されるタブレットの活用など様々なアイデアを出し合い、働き方改革の取り組みを進めていきたい。</p>	
	厚生課	<p>各担当ごとの年間通しての業務内容を明確化する。</p>	<p>各担当以外の業務について課内の共通理解が十分図れていない。担当者が毎年交替することも多く、業務内容を「見える化」し、業務負担の軽減・平等化・計画性を高め、引き継ぎを円滑に行う必要がある。</p>	<p>業務内容を表にまとめ、業務の見直しを検討する。 A 業務負担の軽減が図れた B 見直しできた C 他の担当業務内容を理解した</p>	<p>業務内容をとりまとめ、概ね「見える化」ができた。それをもとに業務負担軽減に向けて今後課内で見直しをしていく。</p>	<p>C</p>	<p>課内の業務内容を「見える化」することで、計画性が高められ、課内での協力体制もできつつある。</p>	<p>B</p>	<p>業務負担軽減への共通理解はでき、検討していく中で少しずつ成果を上げているもの、大幅な見直しには至っていない。今後も引き続き検討していく。</p>	
	教務課	<p>生徒募集にかかわる広報活動 指標に示した①～③の取り組みを中心とする。</p>	<p>令和2年度入学者は定員の70%にわずかに届かない水準にとどまった。広報活動のみが生徒募集の切り札とは限らないが、一手立てとする必要がある。</p>	<p>①学校案内のマイナーチェンジ ②高校説明会の工夫 ③その他の工夫とイノベーション A…①②③ B…①② C…①</p>	<p>①②ともに実行できた。 ③については、普通科通信(中学生に配布)を生徒会や文化広報委員のアイデアを取り入れ、構成を大きく変え、良いものに生まれ変わった。 中止となった夏のオープンスクールに代わって、当初予定の第3回オープンスクールを感染予防対策をとりながら工夫を凝らし実施することとなった。</p>	<p>A</p>	<p>①②③すべて実行できた。 ③については中止となった夏のオープンスクールに代わって、当初予定の第3回オープンスクールを10月10日(土)に感染予防対策をとりながら工夫を凝らし実施し、大盛況となった。</p>	<p>A</p>	<p>中間評価記載内容に加え、中止となった夏のオープンスクールに代わって、当初予定の第3回オープンスクールを10月10日に行うことにより、オープンスクールへの考え方に対し、新しい視点(開催時期と内容)が校内に身生えた。その視点に基づいた考えを集約しながら、次年度の年間計画(広報)に生かしていきたい。</p>	
		<p>学校内外への広報の充実 年度当初、保護者に対し具体的な目標の評価の着眼点を告知するが、アンケート依頼時に成果の掲載を一覧視できるものを保護者に提供する。以上は主幹教諭(地域連携担当)と協働する。</p>	<p>令和元年度の学校自己評価アンケートで「内部広報の充実」といった主旨の質問に対する回答結果は、平成30年度のそれよりも増している。しかし、今後も継続した工夫が必要である。</p>	<p>学校自己評価アンケートでの学校経営目標4に対する、A(よくあてはまる)、B(あてはまる)を併せた保護者及び生徒両方の肯定的な評価が、A…60%以上 B…55%以上 C…55%未満 ※昨年度より5%ずつ目標値を上げた</p>	<p>今期以降に実施する。</p>	<p>－</p>	<p>学校自己評価アンケート結果は以下の通り肯定的評価において(保護者)67.0% (生徒)79.7%</p>	<p>A</p>	<p>外部に対する広報は比較的取り組みとその成果が目視しやすいが、内部広報の難しさは依然として感じるところである。次年度においても、さらに工夫を加えて行きたい。</p>	
		<p>令和2年度入学者は定員の70%にわずかに届かない水準にとどまった。広報活動のみが生徒募集の切り札とは限らないが、一手立てとする必要がある。</p>	<p>令和元年度の学校自己評価アンケートで「内部広報の充実」といった主旨の質問に対する回答結果は、平成30年度のそれよりも増している。しかし、今後も継続した工夫が必要である。</p>	<p>学校自己評価アンケートでの学校経営目標4に対する、A(よくあてはまる)、B(あてはまる)を併せた保護者及び生徒両方の肯定的な評価が、A…60%以上 B…55%以上 C…55%未満 ※昨年度より5%ずつ目標値を上げた</p>	<p>今期以降に実施する。</p>	<p>－</p>	<p>学校自己評価アンケート結果は以下の通り肯定的評価において(保護者)67.0% (生徒)79.7%</p>	<p>A</p>	<p>以上の結果から、飛躍的な改善がみられた。次年度も継続していきたい。</p>	